

各方面の専門家による
ビジネスに役立つエッセンス

「標準化」は 新商品市場展開の ビジネスツール(その2)

新たな中堅・中小企業発技術の標準化制度創設

経産省は2014年7月に、中小企業等で先進的な技術(とがった技術)があるものの、企業1社で業界内調整が困難な場合、中小企業等で原案作成が困難な場合、複数の産業界にまたがる場合等に従来の業界団体でのコンセンサスを経ずに迅速なJIS化や国際標準化を可能とする“新市場創造型標準化制度”を創設しました(図1参照)。この制度により、とがった技術のまま迅速に規格が策定されるとともに、必要な経費も大部分が国から支出されることとなりました。

また、翌2015年11月には、経産省と日本規格協会(JSA)が全国の自治体・産業振興機関・地域金融機関・大学・公的研究機関等の「パートナー機関」と連携し、JSAに配備する「標準化アドバイザー」を中心にして、きめ細かく専門的に支援する「標準化活用支援パートナーシッ

前号では、標準化の基礎や何故ビジネスツールになるのか、などのご紹介をしました。今月号では、中堅・中小企業等の先進的な技術を標準化するために経産省が創設した「新市場創造型標準化制度」(2014年創設)と「標準化活用支援パートナーシップ制度」(2015年創設)についてご説明し、現在の動向をご紹介します。

ブ制度”を創設し運用開始しました(図2参照)。現在全国で94機関がパートナー機関として登録されており、秋田県では秋田県産業技術センターが登録されています。

政府ではこれらの制度の活用により、2020年までに100件のとがった技術の標準化を実現するとしています。

新市場創造型標準化制度で採択されたテーマの事例

新市場創造型標準化制度の創設以来、全国の多数の中堅・中小企業等から標準化提案がなされ、2015年5月に5件、同年12月に3件、2016年1月に2件、3月に4件、7月に4件の標準化提案が日本工業標準調査会(JISC)によって承認されています。現在、これらの標準原案等の作成に向けた活動が継続されています。

以下、採択されたテーマのいくつかについて概要を紹介します。

図1/ 新市場創造型標準化制度(概要)

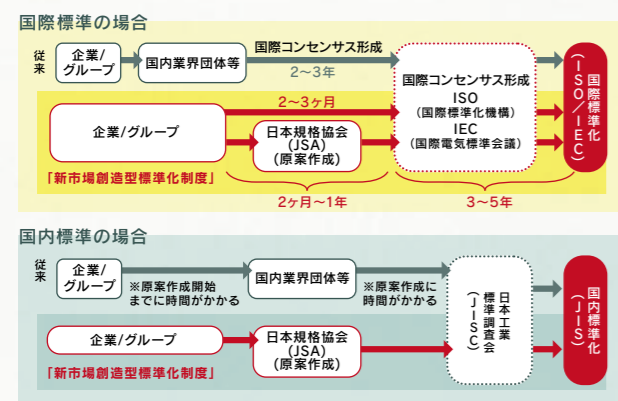
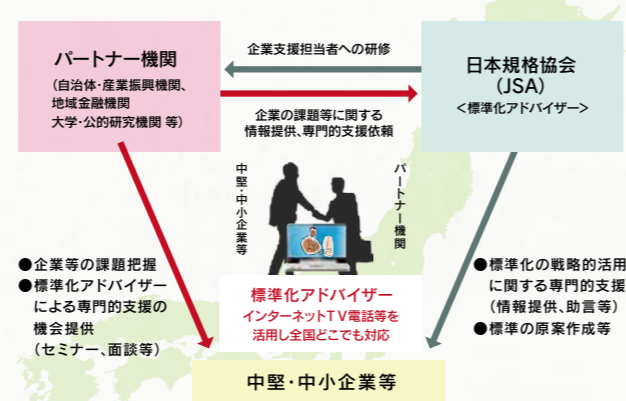


図2/ 標準化活用支援パートナーシップ制度(概要)



● 液体用高機能容器に関する標準化

[㈱ 悠心 / 新潟県 / 従業員12人]

最近醤油さし容器によく見られますが、開封後も液体内容物が高い鮮度を保つことが可能な逆止弁を用いた液体用高機能容器の評価方法を標準化します。(JIS化)…写真1

● 自動車用緊急脱出ツールに関する標準化

[㈱ ワイビーシステム / 埼玉県 / 従業員25人]

交通事故などで自動車に閉じ込められた時に使用されるガラス破碎・シートベルト切断ツールに関する破碎・切断性能を標準化。粗悪品排除に役立ちます。(JIS化)…写真2

● 蛍光式酸素濃度計に関する標準化

[㈱ オートマチックシステムリサーチ / 東京都 / 従業員9人]

耐久性、測定性能に優れた蛍光式の酸素濃度計の評価方法を標準化します。低コスト化を図ります。(JIS化)…写真3

● 腰補助用装着型身体アシストロボットの性能要求事項に関する標準化

[CYBERDYNE ㈱ / 茨城県 / 従業員104人]

公正な比較を可能とする性能基準、性能測定用の試験手順や試験装置の試験方法を標準化。新たな市場を形成します。(JIS化)…写真4

● 超精密用Oリングに関する標準化

[ケーイーエフ ㈱ / 千葉県 / 従業員35人]

精密機器や電子機器などで用いられる超精密用Oリングの形状、寸法及び測定方法を標準化します。中小企業技術を見える化しました。(JIS化)…写真5

● プラスチックの極微量酸化の光学的検出方法に関する標準化

[東北電子産業 ㈱ / 宮城県 / 従業員50人]

極微弱発光検出装置を用いて、プラスチックの極微量の酸化劣化を光学的に検出・判別する試験方法に関する標準化。今までのところ唯一の東北地域発です。(JIS化)…写真6



● 定量核磁気共鳴(qNMR)分析法に関する標準化

[和光純薬工業 ㈱ / 大阪府 / 従業員1,509人] / 日本電子 ㈱]

SIトレーサブルな分析値を求めることができ、かつその精度も極めて高い定量核磁気共鳴(qNMR)分析法を標準化。国際標準化も視野に入れ迅速な標準化をねらっています。(JIS化)…写真7

今後の標準化提案への期待

最後に体験談の一つ。1990年頃だったと記憶していますが、当時スキー板や締め具の国の安全基準やJISを制定しようとしていたところ、欧州のスキー業界からISOと異なるとのクレームがありました。そこで経済産業省の会議室で日本及び欧州の関係者からなる意見交換会が開催され、日本の専門家から“日本の雪は欧州の雪より雪質が重い”ため技術基準が異なってもやむを得ない”旨説明されました。しかし、欧州参加者からは“欧州も雪解けは重くなる”と反論され、この話が耳に入った当時のサッチャー英首相は“日本はこんな屁理屈で技術障壁を作っている”と日本タタキの材料にされました。結局、安全基準もJISもISOに合わせることになったのですが、このような成り行きに直面して(国際)標準化の重要性をひしひしと感じたものでした。

このように、市場に展開するにも防衛するにも標準化は重要なビジネスツールです。ぜひ皆様の新たな自信のある技術を標準化提案していただければと期待しています。詳細は日本規格協会のHPをご覧ください。

[<https://www.jsa.or.jp/stdz/partner.html>]



(一財)日本規格協会
標準化アドバイザー
岩永 明男
Akio Iwanaga

【主な職歴】
昭和49年 1月 通商産業省入省(工業技術院標準部)
平成14年 6月 産業技術環境局産業基盤標準化推進室長
平成18年 7月 東北経済産業局産業部長
平成20年 5月 (社)日本画像医療システム工業会専務理事
平成27年10月 現職